僕は世界を
守れませんでした。
（後編）
(C)2023, ソンム製作所

第三章第一節

一時間か二時間か、それとも３０分か。
とにかくしばらく待った後のことだった。
突然、周りの「暗闇」のあちこちから光が差し込み始めた。
辺りはたちまちまばゆい光に満たされ、あれだけ視界を埋め尽くしていた無限の闇をことごとく消し去ってしまう。
まるで外側から殻を壊された卵みたいだ。
いまやどこに目を向けても真っ白で、視界は無限の白で塗り潰されている。
困ったな。
黒が白に変わっただけだ。
状況は何一つ改善してない。
「そうでもないわ」
誰か女の声が光の向こうから聞こえた。
「ミレーヌ姫・・・いや、ファシーラ？」
「残念ながら。あんたの不細工な嫁さんじゃない」
小鳥のさえずりのように愛らしく、聞き心地の良い声が答えた。
明らかにファシーラの声ではない。
「誰だ。君は誰なんだ」
「エウレナ。かつて大聖女エウレナと呼ばれた・・・美貌の乙女、ってとこかしら」
「人間？」

「勿論人間よ。あんたの不細工な嫁さんと違ってね」
「ここは？」
「あんたの夢のなか。そしてあの不細工な・・・」
「ファシーラの夢のなかでもある。今あんたは、あいつに抱かれて寝てて。おかげさまでこうして話が出来るの」
「もっとも、あいつが『外出』を認めなければそれも無理なんだけど」
「今日は上機嫌みたい。良くも悪くも、あんたのおかげでかもね」
「それで。あたしは用があった来たの。話を聞いてくれない？」
「ああ、構わない。でもファシーラは？どこにいる？どうして出てこないんだ？」
「あの不細工な化け物は熟睡中。今晩の出番はないわ。この夢を認識できないほどぐっすり寝てる」
「会いたい。ファシーラに会わせてくれ」
「だから寝てるって言ってるでしょ？あいつのことはいいから。ちょっと話を聞いてよ」
「うぅぅっ・・・ファシーラ・・・ミレーヌ姫・・・会いたいよぉ・・・」
「まず最初に言わせてもらうけど。私はそのファシーラの体に閉じ込められてるの。随分長いことね」
「おかげで私の実体はもうないわ。あんなに素敵で、外身も中身も非の打ち所のない美人だったのに」
「あいつが産まれたとき、魔王はあたしの意識をねじ込んだの。それからずっとこいつと一緒」
「端的に言うわ。あたしをここから出して。そして、どこの国でもいい。人間の国に連れて行って。魔術師と話せばなんとかなるわ」
「いい？あたしはね、あんたみたいな名ばかり『勇者』とは違う。本物の英雄。姫将軍であり大聖女。実体さえあればまた戦える」
「気色悪い化け物の相談役みたいな、こんな人生はもうこりごり。本来の生き方に戻りたいの」

「聞けば王国軍はだいぶ苦戦してるみたいだし・・・急がないといけない」
「王国が敗れればあとは弱小国ばっかり。魔王軍を止められない。残された時間はほとんどないわ」
「頼りないけど、今はあんたしかいない。あんたの力を借りたいの」
「お願い。この世界の人々のために力を貸して。あいつを上手く言いくるめてあたしを外に出して。お願いよ」
「このままじゃ人間はみんな魔王の奴隷にされてしまう。あんただけなの。それを止められるのは。だからお願い。あたしを外に・・・」
彼女の声は急に小さく遠くなっていく。
すぐに聞こえなくなった。
そしてほどなく、僕の意識も途切れた。

「ケンスケさん？ねえ、ねえねえ」
何かが胸を擽る気持ち良い感覚で僕は目を覚ました。
「あっ♡起きてくれたっ♡おはよう！ケンスケさん♡」
僕を横から覗き込んでいるのは・・・
見覚えのあるレオタードを着たミレーヌ姫。
いや、違う違う。
騙されちゃダメだ。
彼女はファシーラなんだ。
ファシーラは僕の右に寝そべって、楽しそうにこちらを眺めている。
美しい顔立ちに豊満なバスト。

あまりに魅力的な上半身に目を離せなくなってしまう。
ため息が漏れるくらい綺麗であると同時に、なんともエッチなカラダ。
その美貌は強烈で、網膜に永久に焼き付いてしまいそうだ。
「昨日の夢、いかがでしたか？」
砂糖を大幅に増したバニラシェイクみたいな甘い声が耳に流れ込む。
彼女の声に聴覚が悦んで僕の背筋をゾクゾクさせる。
ダメだ。
ダメだ、ダメだ！
まだ起きてほんの少し言葉を交わしたばかりなのに。
こんなにも魅了されて、夢中になって。
これじゃあ僕は・・・
あの子を助け出せない！
「助けなきゃいけないんだ。あの子を」
「エウ・・・レナ・・・って言ったっけ。昨夜あの子と話したんだ」
「あははっ♡もう！『あの子』じゃないですよぉ。エウレナさん、ですよ？ケンスケさんよりずっと年上の人」
ミレーヌ姫は愛らしく微笑んでクスクスと笑う。
どこからどう見ても年頃の美少女としか思えない仕草を見せつけられ、僕の胸はギュッと締め付けられる。
やっぱりダメだ。
こんなに好きになって、こんなに憧れてしまっている。
ダメだダメだ。

ミレーヌ姫をこれ以上好きになったら、本当に勝ち目がなくなってしまう！
「助け出さないと。エウレナさんを」
「そんなに必死に頼まれたの？」
「必死かどうかは知らないけど。真剣だったよ。それに状況を考えれば確かに・・・助け出さないといけない人だ」
「我が身に囚われています。私が産まれたその日からずっと」
「ねえ。協力してほしいんだ」
「・・・」
「このままじゃ大変なことになる。エウレナさんを助け出して戦局を覆さないと」
「我が身に囚われているということは、通常の方法では助け出せないということよ」
「街に連れて行って魔術師に見てもらうんだ」
「それはつまり・・・私をそこまで連れていく・・・そういうことよね？」
「ミレーヌの正体、実はファシーラ様なんです。ファシーラ様は上二大将。そんなサキュバスの大ボスをどうやって連れ出すんですか～？」
「それはその・・・協力してほしいんだ」
「もお。まだ半分眠ってる？ミレーヌはファシーラ。ファシーラは魔王軍の上二大将よ。つまり、あなたの傍にいるのは魔王様の片腕なの」
「じゃあ、なおさらだよ。そんなに高い地位なら公平な戦いに拘るべきだ。ただ勝てばいいなんていうのは下賤の者の発想だよ」
「魔王様から賜った魂を理由もなく解放するわけにはいかない。それに・・・」
「彼女を分離する方法が分からない。よほど高名な魔術師でもなければ無理だと思います」
ミレーヌ姫は頬杖をついて考え込むそぶりを見せる。

「はあ・・・困ったわ・・・」
「時間が全然足りない。今から動き始めてもとても間に合わないわ」
確かに時間は限られている。
カダルハルが攻められた今、王都の陥落は不可避だ。
それまでにエウレナを救出し、王国軍の戦意を回復させねばならない。
しかし、それだけで戦いの趨勢を変えられるだろうか？
いいや、できるだけのことをやるべきだ。
チャンスは最大限活かす。
僕は勇者なんだ。
みんなの期待に応えなくては。
「あっ♡良いことを考えつきました♡」
ミレーヌ姫の顔に満面の笑みが弾けた。
ベッドに降臨した美の女神としか思えないその表情に、僕は少しの間見惚れてしまう。
「朝食で精をつけたらぁ♡エウレナさんを賭けてファシーラ様と戦いましょう♡」
「その練習をぉ♡これからミレーヌと一緒に♡ね？」
「うんっ♡」
僕の精神はドレスのファシーラとレオタードのミレーヌ姫の卑猥な姿で一杯になっていく。
オマンコで、おっぱいで、手コキで、口で、そして着衣で。
思いつく限りの性技でオチンチンを気持ち良く扱いて、最高の快感とともに精液を搾り出してくれる。
あぁっ♡なんて幸せなんだ♡

こんなに好みのキレイな子が愛してくれるなんて♡
中出しも外出しも出したいだけ出せる♡
射精し放題のラブラブなエッチ♡
本当に最高だ♡
「これが公平な戦いと言えるかどうか分からないけど。十分に練習して挑めば、きっと良い結果が得られるはずです」
「うん♡そうしよう♡」
「それから、ファシーラ様はケンスケさんには強すぎるから・・・こうしましょう？」
「ファシーラ様がこうしてミレーヌでいるときはぁ♡できるだけ♡ケンスケさんの味方になりますね♡」
「うん♡」
「でもでもぉ♡油断してると罠に掛かっちゃうから♡そこはしっかり♡気をつけてくださいね♡」
「うんうん♡」
「んふふっ♡中身は同じなのに♡勇者様ったら♡」
「けれどこれは、勇者様にとっては意味があることよね。ミレーヌ姫が味方してくれる。大好きな人が助けてくれる。これほど心強いことはない」
「ね、ケンスケさん♡ミレーヌと一緒に、ファシーラ様と戦いましょう♡」
「うんっ♡」
「じゃあ早速♡練習試合を始めましょう♡一戦でも多く練習しておかないと♡ファシーラ様はとっても強いんだから」
ミレーヌ姫は寝返りを打って仰向けになった。
早く♡早くエッチしたい♡もう待ちきれないよっ♡
僕は慌ただしくガウンを脱ぎ捨てると、憧れのミレーヌ姫に覆い被さろうとする。

「あっ！逆ですぅ♡顔を私の・・・大事なところに・・・♡」
大好きな姫君のいやらしい指示を聞いて胸がドキッとした。
ムフフ♡オマンコを顔で責めてほしいんだな。
鼻と口でいっぱい責めてビショビショにしたら、きっと次は本番セックス。
朝から激しいエッチになりそうな気がするっ♡
下っ腹でのたうつ熱い情欲に衝き動かされるまま、彼女の頭上で股を開き四つん這いになる。
レオタードを纏った女性器の膨らみに顔を近づける。
マゼンタの布地がアップになるに従い、ショートケーキみたいな濃厚な甘い芳香が密度を増す。
まるで、生地一枚隔てた膣穴がガス状のフェロモンを吐き出してオスを呼び寄せているかのようだ。
心が蕩けてしまいそうな心地良い匂いに誘われて、僕は躊躇することなしに鼻先をレオタードに押し付けた。
すべすべした感触が鼻の肌を擦るのと同時に、むせ返るほど濃い香りの塊が鼻孔を満たす。
甘くていい匂いに頭がクラクラして、体から力が抜けていく。
すぐに四つん這いの体勢を維持するのがつらくなり、僕はミレーヌ姫の内股にダイブした。
僕の鼻はちょうど彼女の割れ目に当たっていた。
さっきからずっと僕を誘惑し続ける芳香にうっとりしながら、温かな陰唇を鼻で丁寧に擦ってみる。
「んっ♡はぁん♡」
ミレーヌ姫の声色がメスの悦びを帯びつつあるのは明らかだった。
彼女のモジモジとしたわずかな身悶えに気付いて、僕は自信を強めていく。
僕の責めで感じてくれている♡
さらに縦横に鼻先を使って、女陰の割れ目を広げるように擦り続ける。

「あぁっ♡んんっ♡いいです♡指も使ってっ♡」
そう言われて、僕は両手でミレーヌ姫の花びらを撫で始めた。
でもそれだけじゃ物足りない。
唇と舌も動員して、顔と手を可能な限り使ってレオタードごしの女性器を擦りまくる。
「んんんんっ♡はぁぁぁっ♡んっ！んっ！あぁぁぁん♡」
「ハァハァ♡ミレーヌ姫♡ミレーヌ姫ぇ♡♡」
「あ～ん♡ケンスケさぁん♡もっとぉ♡クリクリぃ♡ミレーヌのクリクリをぉ♡チュパチュパしゃぶってぇ♡」
クリクリ・・・？
すでに溶け切った思考力に代わって、本能と直感が僕を導いてくれる。
頬に触る硬いポッチ。
これだ。
これを責めるんだ。
女陰の上端、膣穴と対称の位置で凝り固まっている突起をレオタードの上から舌先で突いた。
「ぐっ！？すご、すごいですぅっ！」
「さ、サキュ、サキュバスは魔物とはいえ、やはりメスの生き物に他なりません。オマンコは、特にそのクリクリは、すごく・・・」
ミレーヌ姫の甘い声に蕩けながら、僕はレオタードごしの陰唇を指で弄りまくる。
鼻先も割れ目に深く埋め、口を開いてパクっと布地ごとクリトリスに吸い付いた。
「はぁぁっ！！いいっ！イイですっ！いっぱい♡いっぱいしてぇっ♡♡」
先程までポカポカして気持ち良かった彼女の股間は、今やすっかり火照って熱くなっていた。

甘ったるい匂いも益々濃くなって僕の嗅覚を完全に支配している。
考える能力も考える気力も失って、僕はただミレーヌ姫の爛れるほどの色香に浸って、クリトリスを吸って舐めて、しゃぶり続ける。
「あぁっ♡・・・いいわ・・・最高ですっ♡」
「こんなにイイのは久しぶり・・・だから・・・ご褒美、飲ませちゃいますね♡」
突然口の中にシロップみたいな味が広がった。
ただの甘味ではなく、バニラか何かの調味料の入った香りを伴う甘さだった。
その味が美味しくて、僕はゴクゴクッと喉を鳴らして飲み下す。
一体何を飲んでいるのか、どこから出てきたものなのか分からない。
だけど、それは美味しくていい匂いで、僕は次々と吸っては飲み込む。
吸っても吸ってもまた口内にそのシロップが注ぎ足され、決して絶えることがない。
僕はいつの間にかシロップを貪ることに夢中になってしまった。
「あはん♡そんなに飲んだら・・・うふふ♡ダメよぉ♡」
熱を帯びたマゼンタのレオタードが僕の顔から離れていく。
シロップも切れ、僕の口のなかには唾液だけが残った。
ミレーヌ姫の内股はまだ目と鼻の先にあって、ビショ濡れの布地を僕に見せつけている。
双丘の間の割れ目から愛液が滲み出し、周囲に広がっている様子がはっきり分かった。
クリトリスもひどく発情し、ビショビショのレオタードの生地をモコッと突っ張って自己主張している。
僕はさっきまでアレを口で責めていたんだ。
あんなに濡れているってことは相当気持ち良かったはず。

ミレーヌ姫もさぞかし悦んでくれたに違いない。
そういえば、これは練習試合だった。
ファシーラと戦う前の予習。
だったらこれは上出来じゃないか？
このまま追い討ちをかけたら？
アレを責められて悦ばない女の子はいない。
そこまで考えたところで、僕は下半身の異様な疼きに気付いた。
何かおかしい。
下半身が、男性器が。
いやに熱く滾ってヒクヒクしている。
「サキュバスは愛液を媚薬に変えられるんです。効き目の調節も自由自在」
「これでも効果は控えめなんですけどね～♡童貞のケンスケさんには効き過ぎてるみたい♡」
え・・・
何？何だって？
媚薬？効果？
「さっきからケンスケさんのお汁の出方がすごすぎて。私、こんなに顔を濡らされたら・・・」
視界外で姫の指が陰茎に絡みついた。
「もお♡我慢できなくなっちゃう♡」
唐突に、温かくねっとりした粘膜がペニスを襲った。
敏感なオスの弱点の先っちょから中ほどまでをたちまち覆い尽くす。

これは・・・この感覚は！？
６９の体勢である以上、僕の視点からはミレーヌ姫の下腹部と股間、そして太ももしか見ることができない。
一方で僕の泣き所はミレーヌ姫の目の前にあって・・・
彼女は今、それを咥え込んだに違いなかった。
朝一番のフェラチオに悶える暇も与えず、ミレーヌ姫は早速搾精に取り掛かる。
男根の根本を指先で巧みにズリズリと扱きながら、姫は頬を窄めて口内のヌルヌルを擦り付ける。
すでに限界まで勃起し切った男性器は、その２種類の気持ち良さに歓喜してビクッ、ビクッと大粒の我慢汁を滴らせる。
彼女はカウパー液を舌先で舐め取りつつ、指でシコる速さを上げて僕の愚息を追い詰めていく。
「ぐっ！あっ！ううっ！」
いまや攻守は完全に逆転し、危機に瀕しているのは僕のほうだった。
矢継ぎ早に怒張に叩き込まれる快楽を受け止めきれず、僕は全身を震わせて喘いでしまう。
こんなはずじゃなかった。
さっきまで姫の一番の弱点をいいようになぶっていたのに。
ほんの僅かな時間で立場が入れ替わってしまった。
もうダメだ。
勝てる気がしない。
ペニスの根本から半分は小刻みな手コキに誑かされ、残りの肉竿から亀頭はミレーヌ姫の唇と口内で散々に擦られている。
勝てるわけがない。あまりに気持ち良すぎる。
「ううぅぅっ！はぁぁぁっ！んんんぅぅぅっ！」
フェラチオが始まってからまだ何分も経っていないはずなのに、僕はもう射精したくてたまらなかった。

ミレーヌ姫の技のせいなのか、それともさっきの美味しいシロップ・・・
いや、愛液のせいなのか。
射精を逸る下っ腹の荒ぶりを抑え込めず、僕はただただ唸って無駄に悶え、体力を消耗する。
「んふ♡んふふっ♡」
ミレーヌ姫の舌がピタリと亀頭に張り付いて包み込んだ。
すぐにザラザラした舌苔がムスコの敏感な先端を激しく擦りだす。
その微細な凹凸は尿道口に狙いを定めて、精液を催促するように集中的にゴシゴシと責めてくる。
「んっ！ンッ！ングッ！ンンッ！！」
肉棒の根本から先端まで隈なく擦り付けられる性の悦びに身を焦がされ、僕は激しく体を揺らしてヨガり狂った。
ミレーヌ姫は左腕を僕の腰に絡みつかせて固定し、同時にレオタードの股ぐらを僕に寄せてきた。
甘ったるい匂いが嗅覚を再び惑わして、情欲を煽り立ててくる。
大好きな人の大好きな香りを嗅ぐほどに、あのシロップの味が鮮烈に蘇ってきた。
ああ・・・我慢できない・・・
あの甘い味♡
あのいい匂い♡
僕はオスの欲求に抗えず、またミレーヌ姫の紫の股間に顔を埋めてしまう。
鼻で擦り、頬を押し付けて、クリクリの位置を探り当てるとレオタードごしにしゃぶり始める。
薄い繊維に覆われた肉の突起を唇で甘噛みし、乳飲み子のように吸いまくる。
すぐに口のなかに美味しい味が広がって、作りたてのケーキみたいな甘い芳香が鼻孔を満たした。
夢中になって吸うにつれ、麻酔を打ったみたいに頭がぼーっとしてくる。

オチンチンはすっかり気持ち良くなってのぼせ上がっていた。
盛り切った状態で手コキとフェラチオと舌責めを散々食らって、経験不足の男性器が我慢できるはずもない。
ズリズリと舌苔に尿道口を責められながら、我がムスコは射精のカウントダウンに入った。
「んっ♡んんっ♡あんぅっ♡イクゥ♡イクゥゥゥゥ♡」
レオタードに包まれたクリトリスをしゃぶり、吸って、愛のシロップを飲み下し、僕は朦朧とした意識のなか敗北を宣言した。
その途端、ミレーヌ姫は一瞬手コキフェラを止めて、男性器をより深く咥え直した。
僕の本能は彼女がイカせにかかることを察知して、鈴口から一際大きなカウパー液の塊を吹き出す。
そして案の定、僕の憧れの人は精液を搾取するための仕上げに取り掛かった。
肉棒の真ん中を唇できつくロックしたかと思うと、舌の全長を上手に活かして尿道口から亀頭の裏までを舌苔の凹凸でひたすら責め立てる。
さらに二本の指がペニスの根っこに巻き付き、精液を扱き出すように短いストロークでシコってきた。
「あぁっ！んぅっ！はぁっ！！んぐぅっ！！」
痙攣するみたいに僕が身を戦慄かせる間も、ミレーヌ姫は決して責める手を緩めない。
それどころかむしろ指と舌を加速させ、陰茎に愉悦を塗りたくって射精を急かしてくる。
レオタードクリトリスのおしゃぶりに熱中して１０秒、２０秒と極上の性技を堪能するうち、ついに括約筋が我慢の限界に達してしまった。
腰の奥で真っ白な愉悦が炸裂したかと思うと、性欲の迸りが尿管を貫いて男性器の先端から放出される。
ドピューーーーーッ！！
ドピューーーッ！！
ドクッ！ドクッ！

ピュッ！
精液が麗しの姫君の舌にぶつかって弾け、それが喉へと流れ込んでいく様子が分かる気がした。
ミレーヌ姫の顔は見えないが、きっと歓喜の表情を浮かべて搾りたての白濁液を飲み込んでいるに違いない。
指も口も、淫らな責めは全て止め、彼女は精の味に舌鼓を打っているらしかった。
しかし直感が伝える以上に、現実のミレーヌ姫はもっと好色でずっと貪欲だった。
イキ終えたかどうかも判然としないうちに、彼女はさらなる量の精液を要求し始めた。
射精したばかりのヒクつく尿道口を、またしてもあの豊かな凹凸の舌苔で気持ち良く擦って、くすぐって、扱いて強引に射精中枢を参らせようとする。
指コキが速いペースで再開されて男根の根本を苛み、彼女の頭が上下して唇が肉竿をシコってくる。
「あっ！あっ！はっ！ああッ！」
絶頂を経たばかりの感じやすい男根をこうも責められて、僕はたまらずレオタードごしのオマンコに顔を押し付けた。
顔中を美味しい愛のシロップで汚し、大好きな人の股間でマゼンタの布地を擦り狂う。
僕にはもはや思考らしい思考はなく、ただ本能のままにクリトリスを吸い、レオタードを撫で回し、色香を放ち続けるオマンコの虜になる。
逆にミレーヌ姫はオトコのカラダの裏も表も知り尽くしていて、確実にツボをついて男根を魅了していく。
イッた直後のペニスはほどなく射精前より太く固くなり、ミレーヌ姫の卑猥な要求に応えようと必死になって反り返る。
「んちゅ♡くちゅっ♡らしてぇ♡せーしぃ♡もっとお♡いっぱいだしてぇ♡」
艶めかしい誘惑の声が僕の鼓膜をピンクに染めると、イチモツはミレーヌ姫の口のなかで一段とキツく反った。
射精への期待にビクビク震え、ペニスは絶え間なく大量の我慢汁を吹き出している。
ミレーヌ姫が一呼吸置いた直後、舌苔びっしりの快楽舌ヤスリが亀頭に密着し、しつこく尿道口をイジメだした。

亀頭がいやらしい悦びに爛れて僕の脳髄に射精が近いことを知らせる。
あぁっ！またイク！
でも、それが分かったところでどうにもならない。
僕は相変わらず唇を絞ってクリトリスをしゃぶり、レオタードの向こうから分泌されるシロップを吸うことに熱中している。
オスのカラダは僕の意思とは無関係に悶え、身を戦慄かせて、まもなく訪れる至福の瞬間を待ち焦がれるばかりだ。
彼女の指と唇、舌、そしてレオタードの股ぐら。
これでもかというほど綿密に仕込まれたミレーヌ姫の罠に、僕はことごとく引っ掛かってしまっていた。
今はこうして為すすべもなく、正気も精気も失おうとしている。
先っちょを舌でズリズリ擦られ、中ほどを唇でゴシゴシ愛撫され、根っこを指でシコシコ扱かれ、ペニスの表皮からナカまで細胞単位で隙間なく射精欲求で塗り潰されていく。
「ちゅぷ♡ちゅ♡ひてぇ♡はやふぅ♡ざーめんぴゅっぴゅぅ♡はやふひてぇ♡」
ミレーヌ姫は射精を誘いながらも待ちきれないという様子で、口淫と指コキのペースを一気に上げた。
特にも舌にビッシリ生えた舌苔の性感がたまらなかった。
強烈に気持ち良い指コキと唇コキでさえも、むしろ舌苔責めの添え物ではないかと感じるほどだ。
こんな体験を何度もしてしまったら、僕はきっと中毒になってしまう。
いや、もうそうなってるのかもしれない。
それでも、今の僕には快楽を味わう以外選択肢がなかった。
止むことのない舌苔のイボイボ性感責めは尿道口を蕩かし切って、またしても括約筋を弛緩させる。
「うっ！くっ！はっ！あーーーーーーっ！！」
イカ臭い白濁の電撃が腰から全身へと駆け抜け、僕を短く痙攣させた瞬間。

「ちゅぶっ、ちゅうううううっ！！」
猛烈な吸引力が亀頭の穂先に襲いかかった。
ドピューーーーーーーーーッ！！
「はぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」
口内射精気持ちイイッ♡♡
僕が絶頂の快楽にのたうつ間も、ミレーヌ姫のバキュームの性感が尿道を経由して男根を芯から悦ばせる。
「ちゅうううううっ！！」
ドピューーーーーーーーーーーッ！！
「あひぃぃぃぃっ♡♡」
ドピューーーーーーーーッ！！
き、気持ち良い♡♡
ドピューーーーッ
「ちゅうううううっ！ちゅうううっ！」
ドピューーーーーーーッ！！
「おほおおおおおおっ♡♡」
ドピューーッ！ドピューーッ！
気持ち良いぃぃぃっ♡♡
「ちゅうううううううっ！！」
ドピューーーーーッ！！
気持ちイっ♡気持ちイィィ♡

ドピュッ!ドックン!
ドピュ!
ドク・・・
「あ、あが、あ、が、あが、あひ・・・♡」
放精を済ませた後も、姫は唇と指で男根を扱き、亀頭を舌でしつこく舐め回して子種の残滓を搾り出す。
そうして一滴残さず飲み下しても飽き足らないらしく、彼女の手コキフェラは徐々に勢いを増して苛烈な快楽責めに戻っていく。
短時間で2度もイカされたのに僕のムスコは休むことを許されない。
ミレーヌ姫は熟練の口淫と手コキで激しい快感を絶え間なく与え、イチモツをビンビンに勃たせてオスの本能に精液をねだってくる。
僕の意思はもはや関係なかった。
今や姫は男性器を通じて直接僕のカラダと性交渉していた。
オスの求める極上の性感を好きなだけ楽しませるかわり、彼女は欲しいだけ精液を奪う。
男根の根っこを忙しく指先で扱き、唇で肉竿を撫で擦って愛し、舌を常に亀頭に押し当ててザラザラの舌苔でヤスリ掛けして、僕の射精中枢を籠絡しようとする。
風俗嬢も目を丸くするような絶技でペニスの端から端までを性感漬けにされ、たちまち僕の股間は追い詰められていく。
「あっ♡あっ、あっ♡あぁっ♡」
「レロ♡ペロ♡んふ♡レロォッ♡」
舌の微細なデコボコが気どうにも持ち良すぎて、すごい勢いでイキたい気持ちが膨らんでしまう。
射精欲求の膨張が明らかに今までより速い。
ジェット機が急上昇するかのように、ペニスはオーガズムの瞬間めがけて凄まじいスピードで射精の準備を整えていく。

気持ち良くて。
気持ち良すぎて・・・
もうダメだ！
あぁっ！
またイク！
あんなに出したのに。
こんなに速く・・・？
ミレーヌ姫の贅を尽くした手コキフェラ舌苔責めは、僕の予想を遥かに上回る迅速さで効率的にオスのツボをつき、たやすく括約筋を屈服させる。
僕のオチンチンは釣り上げられた哀れな魚みたいにビク、ビクッと何度も反り返ってヨガり狂いながらも、鈴口を大きく割り開いてサキュバスの喉を正確に狙う。
「おぉ♡おおっ♡ほおおーーーーーーーーーーーっ♡」
僕が情けなく鳴いたのを合図に、はち切れんばかりに腫れた怒張は濃厚な白い情欲をこれでもかというほど大量にミレーヌ姫の口の奥に撃ち込んだ。
ドピューーーーーーーーッ！！
キモチイイッ♡
「んっ、ごくっ」
ドピューーーーーーッ！！
キモチィィィッ♡
「ごくん、ごくごくっ」

ドピューーーッ！
ドピューーッ！
ドクン！ドピュッ！
「ごくっ、ごくっ、ごくごく」
ドピュ、ドピュ
ドク、ドクドク・・・
「ごくん。ごく、ごくっ」
「は・・・はぁ・・・ぜぇ・・・はあっ・・・」
僕の顔はいつの間にかレオタードの内股から外れて、太ももに添えられていた。
あんなに味覚と嗅覚を夢中にさせていた愛のシロップも、今は僕の口からすっかり消えてしまっている。
いや、あれはシロップなんかじゃない。
愛液だ。
僕は・・・
サキュバスの愛液を吸わされていたんだ。
あんなに？
すごい量を飲んだはずだ。
体は大丈夫なのか？
唐突に陰茎が粘液と舌苔から解放され、久々に外気に晒される。
「んはっ♡ふぅ♡美味しかったぁ♡」
ミレーヌ姫は精液の青臭いニオイにまみれた気だるい呼気を吐き出した。

その空気の流れはひどく敏感になった男性器をそっと愛撫する。
彼女は物足りそうに喉を鳴らした後、消耗し切った僕を押しやって傍にごろりと転がした。
僕は左隣で仰向けになって、どうにかして呼吸を整えようと懸命になる。
「大丈夫かですって？もう、ケンスケさんたら。大丈夫なわけないじゃないですか」
「魔物の愛液をあんなに飲んだんだから。無事で済むはずないですよぉ。そんなの当たり前でしょう？」
「ぜえっ・・・はあっ・・・僕は・・・どう・・・なるの・・・？」
「いっぱい射精してもぉ♡うふ♡またエッチしたくなっちゃうんです♡」
「ほーらぁ♡見てぇ♡ザーメンミルク１０回分撃ったのに♡このとおりぃ♡」
僅かに残った体力を振り絞って頭を起こして股に視線を向けた。
そこには・・・
嫌になるほどたくましく勃起した肉柱が、唾液と我慢汁でトロトロに濡れてそそり立っていた。
そん・・・な・・・
尋常じゃない量の精液を搾られたはずだ。
だいたいにして射精の時間が尋常じゃない。
本来一瞬で終わるはずの放精の動作が、何秒も、しかも繰り返し強制されて。
僕は気持ち良くて、為すすべもなくミレーヌ姫に口内射精をしまくった。
それなのに。
あれだけ出したのに。
どうしてまだこんなに固いんだ？
「ソレを固くする方法は沢山あって・・・チュウして唾液を飲ませたり。匂いをクンクンさせたり。愛や欲求を昂らせてみたり」

「思い出して。昨日だって一昨日だって。ね？こんな感じだったでしょ？」
「いーーっぱい出してもぉ♡またファシーラ様を抱きしめてぇ♡腰振りいっぱい♡ドピュ♡ドピュ♡ドピュドピュ♡ドピュ、ドピューッって♡沢山出しちゃう♡」
「今朝はやり方が違うだけ♡こうしてどうしようもなく固くなっちゃうのはぁ♡いつものパターンじゃないですかぁ♡」
「と言いつつも。確かに異常よね。出しても出しても固くなっちゃうのは異常です。全然大丈夫じゃない」
「でもこれからは、これがケンスケさんの『普通』になるの。そういう意味では問題なし、『大丈夫』なんです」
「ねえケンスケさん？ケンスケさんは私が欲しいですよね？心も体も。何もかも欲しいですよね？このレオタードも含めてっ♡」
「うん、欲しい・・・」
「じゃあ、ケンスケさんも何か私に捧げないとダメ。私を得る代わり、ケンスケさんも精液とか精力を捧げるんです」
「愛し合うってそういうことよ。どっちか一方だけが与えるんじゃなくて、お互いに与え合うんです」
「でもぉ♡サキュバス相手ならとっても簡単♡毎日ひたすら、一生懸命ドピュドピュすればオッケーですから♡それで十分。ずーっと最高の夫婦で居られるんです♡」
「だから・・・ね？ケンスケさん♡」
ミレーヌ姫は起き上がって僕の腰の横に座った。
すぐに彼女の右手が伸びてきて、なおも性欲を滾らせる我が愚息を捕まえた。
どこか見下すような含み笑いを浮かべながら、ミレーヌ姫は右手を上下に往復させ始めた。